

特設科目「ジェンダーフリーを学ぶII」3年間の授業実践報告

荻原 万紀子

増田 かやの

はじめに

本校カリキュラムの特色の一つ「特設科目」を2年生向けにも設定した1999年度から、「ジェンダーフリーを学ぶII」を行っている。再来年度の「総合的な学習の時間」実施に向けて、形態・内容ともに変更することになるので、ここで3年分の授業の総括をしたい。

自由選択である特設IIは、1年生向けの「I」2単位を履修した者とそうでない者が混在している。また、1単位であるため土曜日隔週で2時間続きの授業で行われるので、まとまった時間は取れるが、次回に続けることが難しい。そのような点を考慮して実施した。いずれの年も年間テーマを自身で設定して、それに沿った研究を自主的に行い年度末に発表してレポート提出すること、夏休みにその中間報告としてのレポートを作成すること課している。

1999年度

この年は、受講生徒が16名と多かった。田中（家庭科）、菊池（地歴科）、増田（保健・養護）、荻原（国語）の4人が担当したが、なるべく多角的にジェンダーの問題を考えていくために、毎回講師から話をしていただいた後、その話に即してディスカッションを行うことにした。お話の内容は、社会・言語・理数と幅広く企画し、なるべく近い話を時期的に近くするようにしたが、講師の都合によって必ずしもそうできなかった。講師は、基本的にジェンダー研究委員が務めたが、他委員会の本校教官や、大学教授、大学院生にも参加していただいた（別表参照）。

講師陣のお話は多岐にわたり、熱心な生徒からは毎回質問が出て、様々な方面で問題を考えることができた。その反面、ディスカッションを深めることができなかった。これは、必ずしも関心の高くない者も混ざっていたこと（特設科目は、理系と語学系の講座が多いため、どちらも苦手な者がこの講座を取ることがある）生徒の人数が多すぎたのでお互いに遠慮が出てしまったこと、教師の人数が多すぎたために気後れする生徒が出たこと、そして講師のお話の後の1時間では所詮議論を深めるには短すぎることに、しかも2週間後の授業の時には内容を忘れてしまっていて、今更続けられない状況になっていることが大きな理由であろう。内容を深められない分、毎回感想を提出させ、次の時間にはプリントにして配布していたが、せっかく生徒たちがこれだけ考えているのに配るだけで終わるのは惜しいと思った

ものである。年間テーマの力の入れ方も生徒によって区々であった。

特設II 「ジェンダーフリーを学ぶ」授業計画 1999

回	月	日	内 容	講 師	備 考
1	4	17	はじめに・ガイダンス、選んだ理由と抱負（言わせた後書かせる）、新聞記事の感想（書かせる）、年間テーマ設定指示		
2	5	1	ディスカッション		
3		15	研究テーマの紹介Ⅰ ジェンダー概論	生活科学部 より院生	年間テーマ提出
4	6	5	研究テーマの紹介Ⅱ セクシュアリティとジェンダー	生活科学部 より院生	
5		19	演劇関係	村野 (公民)	
6	7	3	英語の表現と教科書教材	中津川 (英語)	教育実習期間
7	9	4	ブータンの女性	海士部 (保体)	〃 夏休み課題提出
8		18	女子の数学	茶園 (数学)	
9	10	16	生物的に見た男女の差異	生物学科 松浦教授	
10	11	6	働く母と父 (パネルディスカッション)	石井(理)・ 小菅(英)	
11		20	父親の育児休業	渡辺 (国語)	
12	1	29	ディズニーとジェンダー	石出 (地歴)	
13	2	5	年間テーマ発表		
14		19	〃、終わりに		

※網かけは大学教官が担当

2000年度

受講者8名。前年の反省から、担当は増田と荻原だけにし、講師によるお話の形を取るのもやめることにした。授業の内容は、基本的に毎回完結するものにしたが、講師に依頼もしてないので、必要があれば次回に続けることができるようにした。また、毎回のテーマも、生徒の希望や前時間の話し合いに応じて選べるように、細かい予定は組まなかった。

この年は、生徒の意識・関心も高く、人数も適正であったため、ディスカッションも充実させることができた。毎回の授業計画を綿密に立てておかなかったことも、臨機応変の対応が可能になってよかった(別表参照)。話を講師に依頼できない分、専門的にはできなかったが、増田と荻原で可能な限り行い、後は参考資料を示すことにした。生徒たちが積極的に発言するため、当初のテーマからそれることもあったが、それも幅広い視野につながり、プラス面も多かったのではないかと思う。生徒の年間テーマ発表にも1人あたり1時間を取り、ディスカッションを行わせた。司会も生徒に務めさせ、教師たちも一参加者として質問をし、時に軌道修正や参考意見を述べる程度にした。たまたま「女性と仕事の未来館」で行われたリレートーク「女性の目指したもの、目指すもの」は、授業を振り替えて参加した。記録的な大雪の日だったが、1人の欠席者もなく、後で「大変おもしろかった」、「有意義だった」という感想が聞かれた。そのため、当日の参加者であった赤松良子氏が登場する「プロジェクトX」のビデオを見せたところ、やはり深く感銘を受けていた。いきなりビデオを見せていたのではこのような感動はなかつたろう。幸運にも恵まれ、意義深い1年間の授業ができたのではないだろうか。

特設II 「ジェンダーフリーを学ぶ」授業実施内容 2000

回	月	日	内 容	備 考
1	4	15	はじめに・ガイダンス、選んだ理由と抱負（言わせた後書させる）、原始社会の性別役割分担	増田不在
2	5	20	男女の大きさの違い・平安時代について…女帝の消滅と女官の変容枕草子の女性観・源氏（雨夜の品定め）・朝日新聞記事（男女とも専業主婦志向）→話し合い	
3	6	3	相撲協会と女人結界→外国との比較、差別全般	増田不在
4		17	前回の感想・女性の貞操について（今昔物語集）	
5	7	1	化粧の話（新聞記事）・レイプとペアボンドについて（女性史・動物の話）・性別役割分担（新聞投書）	
6	9	2	年間テーマ（夏休みレポート）途中報告	
7		16	女性の生殖と健康の問題 （VTR「ABORTION—北と南の女たち」）	荻原不在
8	10	7	ノルウェーの育児関連政策（朝日・読売記事…違う観点） →年金の話になる	
9		21	年金の話（つづき）…増田より 結婚と子育ての話（動物・原始～現代）	
10	11	4	・梶原「女性と依存症」 ・安本「平安時代の女性」	以後生徒発表
11		18	・福野ま「子育ては誰の仕事か」 ・伊藤「日本における外国人の扱い」	
12	12	2	・安井「あさきゆめみし」 ・越川「社会変容と女性」	
13	1	27	リレートーク「女性の目指したもの、目指すもの」参加	休校日 3月授業と振り替え
14	2	3	・福野ゆ「梨園の妻」について ・市川「現代日本の女性像（含. 女性史）」	
15		17	・プロジェクトX「男女雇用機会均等法」ビデオ観賞 ・全体を通しての感想	

2001年

受講者3人。

ということで開講をためらったのだが、第一希望の者が3人ということで実施した。ジェンダー関連科目は、通常あまり受講希望者が多くない。受験科目に役立たない、日ごろ問題意識を感じていない、などの理由が挙げられよう。今回は、増田・荻原両名が1年次の授業に全く出ていなかったのも、馴染みがなかったことが大きな理由ではないかと思うが、我々も宣伝に努めるべきであったろう。

前年度の授業方針を基本としたが、最初にやわらかめのテーマから入って人間関係を作ろうという趣旨から、「もののけ姫」(STUDIO GHIBLI) ビデオの一部を見せることから授業を始めた。また、この時に尋ねたところでは、3人とも少子化問題に関心があるということだったので、1学期はその問題を考えることにした。生徒が少ない分、積極的に授業作りに参加してもらいたいと考え、毎回、新聞記事その他、興味を持った資料を持って来るよう指示した。幸い3人とも熱心で、雑談のような形からジェンダーを中心とした問題に話を発展させることができた。生徒の関心を中心に進めようと考えたため、教師側の準備はしていくものの、その場で変更することも多かった。1学期末にイスラム世界の女性の位置付けについてたまたま話をしたのだが、9月11日に同時多発テロが起こったため、2学期はそのままイスラム世界を中心とした世界の女性について考察していくことになった。話題がジェンダーからそれることもあったが、生徒は「全然わからないことだったので勉強になってよかった」と言っていた。ただ、同時に生徒が新聞記事の切り抜きを持って来ることは減ってしまった。生徒たちは、それと平行して各自の年間テーマを調べていたので、やむを得ない面もあったが。

また、人数が少なかったため、司会を立てることはなく、教師も交えて殆どフリートークの形で進められた。後の資料に示すように、生徒たちは自由に意見や感想を言えることを喜んでいて。

最後の授業では、世界の女性についての締め括りとしてビデオを見せたが、生徒たちは、「自分たちも世界に貢献したい」という思いを強くしたようである。来年度特設IIは「国際貢献とジェンダー」として開講する予定であり、今年度の成果と反省を生かしていきたい。

特設II 「ジェンダーフリーを学ぶ」授業実施内容 2001

回	月	日	内 容	備 考
1	4	21	はじめに・ガイダンス、選んだ理由と抱負（言わせた後書かせる） アニメ「もののけ姫」に見るジェンダーと女性の地位	
2	5	19	生徒・教員準備の新聞記事（ワークシェアリング・少子化問題）→話し合い	
3	6	16	少子化問題 （新聞記事・川本敏『論争・少子化日本』中公新書ラクレ01）	
4	7	7	動物のペアボンド・原始時代男女の役割分担 イスラム世界について	夏休み宿題指示
5	10	6	今岡昌子写真展「リバース」見学	
6		20	年間テーマ（夏休みレポート）途中報告 同時多発テロおよびイスラム世界について	
7	11	17	イスラムと女性・宗教と女性・タリバンについて（新聞記事・田中宇『タリバン』光文社新書01・『BooksEsoterica-14イスラム教の本』学研）	
8	12	1	女性の生殖と健康の問題 （VTR「ABORTION－北と南の女たち」）	
9	2	2	生徒発表・「ことばにひそむジェンダー」 首相発言「涙は女の武器」をめぐって（新聞記事） ワークシェアリングについて（新聞記事）	
10		16	生徒発表・「日本人は女性をどのように見ているのか」 ・「チャイルドフリーの女性」	
11	3	2	女性の生き方と世界貢献（VTRテレビNHKスペシャル 「緒方貞子「難民と歩んだ10年」」 雛祭りとジェンダー	

特設II 私の年間テーマ

2年____組 氏名_____

年間テーマ

調べ方

その他

特設II「ジェンダーフリーを学ぶ」 2学期発表予定 2000

月	日	時間	担当者	内容	備考
10	21	3			
		4			
11	4	3			
		4			
	18	3			
		4			
12	2	3			
		4			

「ネパールにおける開発とジェンダー」

私は以前から国際協力に興味があったので、発展途上国の開発とジェンダーの関係について調べてみることにした。特にネパールを選んだのは、世界の最貧国のひとつであり、またヒンズー教徒が大部分を占めるので考えやすいと思ったからである。

1、ネパール

ネパールは147000km²の国土に21360000人の住む(新詳高等地図 1999)それほど大きな国ではないが、信仰、文化、伝統、家族構成などは非常に多種多様である。しかし宗教については9割がヒンズー教徒、職業も9割以上が農業に従事している(表1、2、3)のでここでは主にそのような人たちについて考えたい。

まず、ヒンズー教だが、これは仏教やキリスト教の意味での宗教ではなく、人々の生活と社会制度、信仰、風俗、習慣などを包括しているものだといえる。ヒンズー教はネパール人の女性観に大きく影響している。例えば「幼いときは父の、若いときは夫の、夫が死んだときは息子の支配下に入るべし。女は独立を享受してはならない」(マヌ法典)である。子供たちは小さな頃からこのような言葉を教わり、「うそをつくと女が生まれる」などの日常的な格言も無数に存在する。

次に、結婚についてだが、ネパールにはカースト制が残っており、その形態はカースト、地方によって異なる。上位のカーストではアレンジメント婚(親が相手を決める)で一夫多妻婚が多く見られ、離婚は少ない。そうでないところでは基本的にアレンジメント婚、娘さらい婚、駆け落ちがある。娘さらい婚、駆け落ちをした場合、男性は女性の両親に賠償金を払い説得する必要がある。この上位とそうでないカーストの結婚形態の違いは、上位のカーストの女性にとって結婚は罪を清める浄法であり、そうでないものにとってはたんに快樂のためとするヒンズー教の教えによるものと思われる。ヒマラヤ高地に住む人々の間には多夫一妻婚が見られ、女性も離婚を申し出ることができる。またヒンズー教では妻の年齢は夫の三分の一が理想とされ、早婚の原因となっているが、これは都市部では改善されつつある。

表1 宗教別の人口推移

	1952/54	1961	1971	1981
ヒンドゥ教	7,318,392	8,254,403	10,330,009	13,445,787
仏教	707,104	870,991	866,411	799,081
イスラム教	208,899	280,597	351,186	399,197
ジャイナ教		831	2,541	9,438
キリスト教	634	458	-	3,891
その他		5,716	5,836	365,445
合計	8,235,079	9,412,996	11,555,983	15,022,839

↑
「ネパール人」より →

表3 生業別人口 (1981年)

農業・林業・漁業	6,244,289 (91.1%)
鉱業・石工業	971
製造業	33,029 (0.5%)
電気・水道・ガス	3,013
建設業	2,022
商業	109,446 (1.6%)
金融・サービス	9,850 (0.1%)
運輸・通信	7,424 (0.1%)
家事・手伝い	313,570 (4.6%)
その他	127,272 (1.9%)
合計	6,850,886

2、人身売買

ネパールだけではなく世界中で女性が抱えている問題が人身売買である。人身売買の主な目的は売春婦として働かせることであり、ネパールの場合はインドに連れていかれる。現在インドの売春宿で働くネパールの少女は17万2千人に達すると言われている。さらに1970年代以降の犠牲者は11歳から14歳の少女たちで占められており、低年齢化が進んでいる。

ネパールで売春がはびこってきた背景には昔からの因習がある。たとえば西ネパールの「バディ」と呼ばれる半遊牧民で、かれらは村々を回って歌ったり踊ったりして生計を営んできたが、昨今の映画やビデオの氾濫でそのままでは受け入れられなくなり、生活は苦しくなってきた。その結果、女性たちはやむなく売春に身を投じるようになったのである。また、「デウキ制度」というのもその一つである。これは親が自分の娘を寺院に捧げることである。捧げられた少女たちは成長するにつれて、寺からの限られた収入に不満を持つようになり、すでに僧侶から手ほどきされているセックスを生活の手立てとして利用するのである。「デウキ」の少女と性交渉を持つと永遠の幸福が得られるという迷信が今でも信じられていることも売春を助長している。しかしすべての少女が「バディ」や「デウキ」なのではない。現在多く行われているのは、親や親戚が斡旋人に売ったり、だましたり誘拐したりして連れていくことだ。

この問題を解決するためにまず必要なのは教育である。読み書きができればネパール国内でも仕事があるはずである。けれど、文字や公式の丸暗記ではいけない。少女たちに、教えられたことについて自分で考える力がつけば、騙されることは減るだろう。男性にも女性にも性教育は必要である。男性は今でも処女と性交渉を持てば性病が直ると信じているのである。また、「バディ」については、かれらの文化を国が保護することが解決につながるのではないかと思う。

一見、この問題は日本とは関係がないように見えるが、近年人身売買は発展途上国と開発国の間で盛んになってきており、実際に日本にも多くのアジアの女性が連れてこられている。海外の売春宿を訪れる日本人も多い。こうした国家間の関係は開発国が発展途上国を搾取する、一種の南北問題だと思う。見えにくい問題ではあるが、日本政府には外国との関係、特に民間レベルでの関係に目を向け、真剣に取り組んでほしい。

3、教育

「2、人身売買」で教育が必要だと書いたので、ここでは教育の問題と取り上げようと思う。ネパールでは女子生徒の割合は小学校35%、中学校29%、高等学校27%である。教師は86397人いるが、教師として訓練を受けたのは33%であった（教育省報告「ネパールの教育資料」1989年）。

女子に教育を授けるのは特別な恩恵である、という社会全体の考え方が女子教育を妨げている。ある調査によると、6歳から15歳までの少女の77%が中退する。もし家族が

経済的に困窮すれば、息子よりも先に、娘に学校を辞めさせるのは親にとって自然なことである。しかも女の子は家事に従事し、大人とほとんど同じ仕事をこなすので、親は学校へ行かせたがらない。10歳から14歳の男子の平均労働時間が4.5時間なのに対し、女子の場合は7.3時間である。これでは働きながら学校へ通うのは不可能である。

そこで文部省は通常の時間帯に通学できない少女のために6ヵ月間の特別教育プログラムを組織し、運営している。非公式の学級も多く開かれている。こうして学んだ少女たちが大人になって家庭を持ったとき、その知識を活かせば、家族全体の栄養状態が良くなり、また自分の娘も息子と同様に学校へ行かせようとするのである。さらに、教育を受けた女性たちは男性が牛耳るテレビだけでなく、文字から情報を得られるので事実を正確に把握できるようになる。

教育を普及させるのに必要なのは、学校を増やすことではなく、少女でも働きながら通えるこうしたプログラムを増やすことだと思う。そのために、政府は非公式のプログラムや、ヒンズー教以外の宗教団体でも干渉すべきではない。そして男女差別を子供たちに植えつけないために、少なくとも初等教育は共学にすべきである。

4、開発活動

教育を受けた女性たちは開発活動にも参加できるようになる。開発プログラムには、現金収入のためのプログラム、技術者養成のためのプログラムなどがある。

ネパールでは伝統的に女性は家事と農作業、男性は機械を使った仕事と作物の換金というように性別役割分業が行われているため、女性は現金が手に入らない。たとえば、ある女性グループは現金収入を得るために野菜を生産していたが、野菜は女性たちが家事で忙しい朝に町に持っていかねばならないので、男性が市場での取引をすることになった。こうして女性の労働の報酬は男性の手に落ち、女性は現金を嘆願する立場に置かれるのだ。このプロジェクトの報告者は、常設の取引施設や貯蔵設備を組織して、女性が時間的に余裕のある日中に野菜を売ることが可能にする有利さを認めた。しかしこのプロジェクトはさらに発展して、男性が朝の家事労働を担当して女性が生産物を売りに行くということも実現する必要がある。この例は、ただ女性をプログラムに組み込むことだけではなく、決定のできる立場まで引き上げ、そのような立場に就ける環境を整えることの重要性を示している。話が飛ぶが、これは日本にも当てはまる。女性の雇用だけを増やしてもそれは男性の管理者に支配される女性を増やすだけである。女性にも管理者になる機会を平等に与えなくてはいけない。

また、ネパールではテレビやラジオなどの人気の高いメディアを男性が牛耳っている。ダウリー殺人や売春の裁判などのニュースはもちろん歪めて伝えられる。職字率の低い国ではこれらのメディアは人々に多大な影響を与える。

正しい情報を得るために、女性たち自身が女性のための新聞を発行するグループを作ったらどうかと思う。確かに新聞では影響力が少ないが女性たちに意識と団結力を高めるの

に役立つのではないだろうか。非政府組織はこの運動に協力することができる。また政府に管理されないこうしたメディアがあれば、環境、売春、エイズ、未成年者の労働など、取扱いに慎重を要する問題について、素直に、自発的に、しかも正直に意見を述べることができるだろう。

5、考察

1973年インドで「チプロ運動」が起こった。土建業者が政府許可省を持って木の伐採に来たとき、その女性たちが木を抱きしめ、生命をかけて立ち向かったのだ。この運動は、女性がいかに森林保護に貢献したかを物語っているとして有名になった。これ以後、森林の保護と開発のためにも、女性の技術と知識を利用して、森林管理事業計画に女性を参加させるべきだとの意識が高まった。しかし、どんな開発においてもそうだが、女性を参加させるだけでは男女差別はなくならないと思う。女性も男性も互いの持っている技術と知識を持ち寄って分かち合う必要がある。両方の性の中に意思の疎通がなされなければ、開発は成功しないだろう。

発展途上国で女性の就職が難しいのは、西欧中心の開発を推し進めたことが一因とも言われている。工業の発展や経済成長だけを目標に開発を進めたところ、すでに技術や知識を持っていた男性に有利となったのである。開発を行うときは、国家の利益より、個人の健康や男女差別をなくすことを優先して考えなくてはならない。また開発国が発展途上国の開発を行うときは、現地の実情に合わせて、「援助」ではなく「協力」という意識で取り組むことが大切である。特に日本はまだ男女差別が残っているので、日本の女性がアジアの女性と協力して戦っていくことで、日本だけでなく、アジア全体の社会を変えていけるのではないかと思う。

6、参考資料

- ・アジアの女たちと宗教／山下明子／開放出版社／1997
- ・エンパワーメントの女性学／村松安子、村松泰子／有斐閣／1995
- ・女たちのアジア／松井やより／岩波書店／1987
- ・ジェンダーと女性労働 その国際ケーススタディ／セア・シンクレア、ナニカ・レッドクリフト／拓殖書房／1994
- ・立ち上がるネパールの女性たち／プラティヴァ・スベディ／花林書房／1996
- ・増補新装版 ネパールの人々／D. B. ビスタ／株式会社古今書院／1993

〈授業の感想〉

この授業では、内容もそうですが、生徒が8人でしかも先生から教わるだけではないという形式が私にとってはとても新鮮でおもしろかったです。少ない人数だと、みんなの個人的な意見が聞けるので良いと思います。自分では、この考えが当たり前、と置いていても、実際は違う考え方がいて、他人の意見を聞くのも大切だと思いました。自分とは違う意見を認めることの大変さも実感しました。授業でいろいろな例（避妊、シングルマザーなど）を知っても、どうしてもこれは受け入れられない、というのがいくつかありました。受け入れるとまではいなくても、できる限り認められるようにしたいです。

一年間学んできて、一番影響を受けたのはやはりこのレポートです。最初は楽な授業としか考えていなかったのですが、レポートのために調べ始めてからだんだん楽しくなってきました。それでそのころから、今まで考えてきた針路を変えて大学でもジェンダーや開発について学びたいと思うようになりました。そうできるかどうかはこれからの努力次第ですが……。この授業とレポートで学んだことはどんどん友達に広めたいと思っています。一年間ありがとうございました。

〈おまけ〉

入試休みの間にスイスでホームステイをしてきました。その時の報告です。

私が泊まった家は6歳の男の子がいる3人家族でした。この男の子はブラジルからの養子です。だんなさんは普段は会社で働いていますが、お昼には家に帰ってきて昼食を食べます。以前は電車で50分かけて通勤していたそうですが、今は歩いて5分なので子供と過ごす時間が増えて良かったと言っていました。彼は奥さんがテーブルについていても、食事を出したりしてくれました。

町に出て驚いたのは、トイレの表示が男女とも同じ色だったことです。両方とも赤か青か黒です。マーク（女性がスカートで男性がズボン）は同じです。しかし私はぱっと見てどっちがどっちか分かりませんでした。無意識のうちにジェンダー的な色分けに慣れてそれで判断していたんだなと思いました。

「ことばにひそむジェンダー」report

私がこのテーマを設定した理由は、特に「ことばにこだわる」ということを考えたかったからです。ことばには人の思想が表れるといえます。それは人間がことばを通して思考しているからです。法制度における男女平等は、確かに進んだと思います。しかし、人々の意識や社会の風潮は遅々として変わりません。鏡のように社会を映し出し、時代とともに変化する「ことば」を通して、この問題について考えてみたいと思いました。

まずはじめに、歴史的な目から、「ことばの性差」を考えてみます。

ヨーロッパの言語の多くは、昔から「男性名詞」「女性名詞」などと、ことばに性があります。この性差にはどんな意味があるのか、調べてみました。

ドイツ語を例に挙げると、名詞は男性・女性・中性に分かれていて、分かりやすいものには、「父＝男性名詞」「母＝女性名詞」「国＝中性名詞」などがあります。「芸術＝女性名詞」「勝利＝男性名詞」なども、何となく分かるような気がします。しかし、「川＝男性名詞」でも「ドナウ川＝女性名詞」だったり、スロヴァキアでは「ドナウ川＝男性名詞」だったり、ハテナ？と思うような分類が数多くあるのです。なぜなのでしょう。これには、全く基準がないのだそうです。ドイツ人に直接尋ねても、わからないと答えるのだそうです。ただ、「昔からそうなんだ」といいます。つまりこの分類は、感覚と習慣から長年培われてきたものといえます。また、「太陽＝男性名詞」（太陽神アポロン）「月＝女性名詞」（月の女神セレネ）ということから、ギリシャ神話の影響も受けているだろうと考えられています。

ここで、ひとつ面白いことがわかりました。フランスからアメリカに贈られた *The Statue of Liberty* は、日本語には「自由の女神像」と訳されます。Statue ということばはラテン語で「立つ」つまり「彫像」という意味なのに、なぜ「女神像」になるのでしょうか。調べてみると、Statue はフランス語の女性名詞である *la statue* (立像) からきたことばで、さらに Liberty も同じく女性名詞である *la liberte* (自由、独立) からきたことばです。つまり、ことばに性がない英語では女性名詞・男性名詞であることを訳すことはないけれど、*The Statue of Liberty* は女性的な要素が強いことばであることが言えるのです。これは「勝利の女神」からきているのではないとも言われているそうです。

ヨーロッパの言語はこのようにはっきりと性差があって、調べていてとても興味深いなと思いました。

一方、はっきりとした性差はない日本語にも、昔の人々の男女に関する認識がよく表れているようなことばがたくさんあることがわかりました。特に「ことわざ」を調べていくと、驚くようなものがたくさんあります。例えば、「女は三界に家なし(女は、若い時は父に従い、結婚したら夫に従い、年をとったら息子に従うものであるから、世界中に定まった家というものがない)」や「男は松、女は藤(松に藤がからまるように、女は男を頼って生活すべきもの)」などは、「女は男に従うもの」という意味のものであるといえるし、「男の馬鹿と女の利口で釣り合う(女の利口といっても知れたもの。愚かな男とちょうど)」や「腹は借り物(子供は、母親の腹を借りただけのこと。母系よりも父系が重要なたとえ)」などは、「女は劣っている」という男尊女卑の考え方がとてもよく表れているといえます。

このように、男女の差というものが、社会を映し出す「ことば」にあらわれるということが、歴史的・文化的な目から見てよくわかりました。

次に、現在のことばから性差を考えます。

夫婦間の呼称を例に挙げてみます。すると、「女房」「主人」「旦那」など、古い表現が未だに多くの人に使われていることが分かります<表>。

「夫の呼称」

主人	夫	亭主	旦那	うちの人	つれあい
51.1%	46.2%	1.2%	0.7%	0.5%	0.3%

『「ことば」に見る女性』'87制作パネルより

「主人」に関しては、現在でも主従関係を意味することばとして生きているのだから、夫の呼称に「主人」を使うことは男女平等の観点から言って問題であると言えると思います。

また、女性の仕事について調べていくと、気がつくことがあります<表>。

「女性冠詞」

男性	女性
作家	女流作家
警官	婦人警官
党首	女性党首
社員	女子社員
医師	女医
俳優	女優
主人	女主人

このように、女性が仕事につくと、女性冠詞がつけられるのです。これは、英語でもいえることで、例えば「chairman(委員長)」「policeman(警官)」などの man ことばや、「waitress(給仕人)」「actress(女優)」などの女性語尾がつくもの、「nurse(看護人)」など潜在的に男女を表わすようなことばなど、色々あります。このことは、もともとは男性のみの領域であった分野に女性が進出してきたことに対して、「特別に例外的に認めましょう。しかし、あくまでも『女』であることを忘れないで」という念押しのように見えてなりません。

次に、国語辞典についても調べてみました。すると、驚くべきことが分かったのです。国民的辞書とも言われる「広辞苑」にも、決して男女平等とは言えないような表現がありました。例えば、「女」ということばの説明のなかに、「天性やさしいとか、感情が豊かだとかいう通有性に着目している場合の女性」という意味がありました。「男」にも、「強くしっかりしているなど男性の特質をそなえた男子」などと書いてあります。女性が天性やさしいわけがありません。それはあくまでも個人個人の性質であって、男性の性質、女性の性質とはいえないと思います。国語辞書が、こんなにも偏ったことを書いていることに疑問を感じました。また、意味だけでなく、用例に使われる代名詞などにも偏りがありました<表>。

男を表わす語		女を表わす語	
「彼」	44	「彼女」	5
「男」	48	「女」	27
計	92	計	32

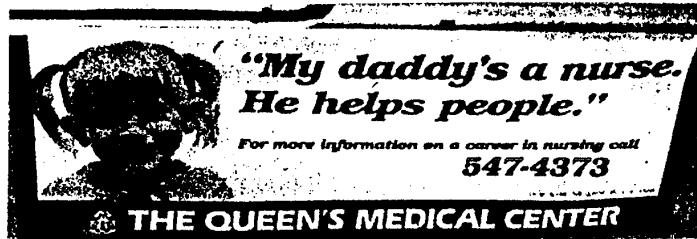
名実ともに「国民的辞書」であるためには、国民の半分を占める女性を軽蔑し、無視するような辞書であってはならないと思います。辞書作りにもっと「女の目」が加えられるべきだと思いました。

このように色々と調べてみて、現在でも、まだまだことばは男女平等ではないことがわかります。ところが、女性語尾や女性冠詞について「区別であって差別ではない」という声をよく聞きます。一見議論が成り立ちそうな気がしますが、私は「区別は差別のはじまり」だと思っています。社会全体が女性差別的であるかぎり、区別は自然と差別につながってしまうのです。その典型的な例が、master に対する mistress ということばです。元々は<召使>に対する<主人>という意味であったのが、mistress だけ「性の対象として男性に所有された女性」という意味になってしまったのです。このように、男性中心主義の根があるかぎり女性形は性差別語につながってしまうといえます。だからこそ、ことばの性差をなくすということが重要なのです。英語の女性形を「ジェンダーフリー」にかえようという動きを紹介します<表>。

⇒⇒⇒ジェンダーフリーに！

businessman	business person, manager
cameraman	photographer
chairman / chairwoman (委員長)	chair (男女ともに)
fireman (消防士)	firefighter
mankind (人類)	human beings, people
man-made (人工の)	artificial, hand made
policeman (警官)	police officer
actress (女優)	actor (俳優)
hostess (客に対する「女主人」)	host (主人)

「ホノルル市女性の地位委員会制作 Do's and Don'ts for Non-sexist Language」より



ホノルル市内のバス広告だそうです。

ある女性のことばで、とても印象に残ったものがあります。「人間科学については、『真実』は二通りある…男の見た真実と女の見た真実と。女の見た真実が男にとっていかに不都合、不愉快なものであっても、それもまた真実として、認知される権利がある。（『フェミニズム批評』織田元子 勁草書房）」です。本当にその通りで、この地球上の全人類の半分が女性であるのにもかかわらず、多くの場所で今も男尊女卑の意識が消えません。しかし、このことに彼女たち自身は気付いているのでしょうか。私はこの一年間、ジェンダーフリーの勉強をしてきて、やっと意識するようになりました。日本も、まだまだ男女平等とはいえません。それは、人々の意識自体が変わっていないからです。もっともっと多くの人に、男女平等をめざす意識を持って欲しいと思います。それには、まずことばから変えていくことが必要です。ひとりひとりが意識し、考えることによってこそ、本当にジェンダーフリーの社会が生まれるのだと思います。

<参考資料>

- ・「『ことば』に見る女性 ーちょっと待って、その『ことば』ー」
井出祥子 東京女性財団/株式会社クレヨンハウス
- ・朝日新聞
- ・<http://member.nifty.ne.jp/doppeladler/sparche/sparche.htm>
- ・<http://www.tamagawa.ac.jp/sisetu/kyouken/A1/Handouts/Q&A2.html>

男性・女性冠詞に
関するサイト

<授業の感想>

今年の特設は授業数が極端に少なく、そのせいか1年間は本当にあっという間でした。はじめの頃は、たった5人で授業が成り立つのか不安でしたが、少人数だからこそ自分の意見も言え、楽しくやれたと思います。

高一の時に初めて「ジェンダーフリー」という言葉を知って、私は大きなショックを受けました。この一年間勉強して、理解が深まったと思います。私の中で、男女に関する意識も大きく変わりました。高校生のうちにこのような発見があつて良かったと思います。

改めて日本の社会を見ると、まだまだ男女平等が実現していない部分だらけです。ジェンダーフリーをめざす意識が、多くの人に浸透していないからだと思います。今後は、自分の理解を深めるとともに、周りの人にもジェンダーの意識を広めたいと思うし、そうすることが私の責務のような気がしています。

一年間ありがとうございました！！